

寓意小説の学習指導

——石川淳作「アルプスの少女」の場合——

菅 原 敬 三

石川淳作「アルプスの少女」の学習指導の報告である。学校図書「中学校国語二」に載せられた教材で、單元の中では、「5人間と行動」として、「走れメロス」と並べられている。教材として中学校の教科書にとられたのは、はじめてであり、中学校の教材としてはかなり難解な作品である。

私がこの作品を授業で扱ったのは、昭和五年三月七日（金）六限、校内研究授業の時であった。三学期に扱ったのは、学年の早い時期に扱うには、難解すぎると考えたからである。

この作品は、作品の性格上「寓意小説」と規定されるが、寓意小説の学習指導の実践例として、私が身近に見ることができるところに、「『アッタレーア・プリンケプス』（ガルシン作）を中学生に読ませてみて」と題して、三浦泰生氏の報告がある。（国語科研究紀要創刊号 広島大学附属中等学校）

寓意小説の読み方としては、氏の報告にあるように、寓意された箇所・寓意された意味を生徒に自由に発表させ、多様な解釈が成り立つことに気付かせるのが、最も面白く、正統なやり方であろう。しかし、この方法を私はとらなかつた。研究授業という制約もあつ

たが、何よりもまず難解すぎるのではないかと思つたからである。また、多様な解釈が成り立つということから、小説というのは、どのようにでも好き勝手に読んできまわらないという安易な結論に至るのを恐れたためでもある。

二

「アルプスの少女」は、昭和二七年十一月号の「文芸」に発表された。題名を見てもわかるように、ヨハンナ・スピリの「ハイジ」を典拠としている。同じ系列の作品に、「小公女」（昭二六・六）「蜜蜂の冒険」（昭二七・八）「乞食王子」（昭二七・八）「白鳥物語」（昭二八・四）「家なき子」（昭二九・三）「愛の妖精」（昭三〇・三）があり、同じく「文芸」誌上に発表された。

「アルプスの少女」は、「ハイジ」を典拠としているとはいへ、登場人物や背景を借用したにすぎない。原作の終ったところからクララの物語として始まる。そのおおよその内容を紹介しておこう。

「切り立った丘にある小屋の前に一人の少女が立っている。クララである。気合いのこもった姿勢で立っている彼女の目をとらえているものは、山の下の遠い世界である。ハイジとベーターが牧場でクララの来るのを待っているのにも拘らず、彼女を山の下の

の世界に誘うものは、自ら立つことを知った足である。山の世界で、彼女は何の苦勞も知らない。彼女をとりまく環境は彼女にとって申し分のない世界である。唯一つ不思議なことといえば、クララを励まして大地の上に立たせるようにしてくれたハイジが、記念撮影の写真の中では、一輪のまっ白な花に変っていることであり、木のいすに腰かけていたアルムじいさんが、金色に輝く朝日の中で水滴に変っていることであった。見知らぬ土地に、自分で立つてみたいという足の希望に負けて、クララは山の下の世界に降りていくことになる。

山の下の世界で、彼女を待っていたものは、いくさであった。そこで、いやというほど苦勞を味わった彼女は、意外にもペーテルと出会う。彼は政府の力によって、否応なく山の世界からつれてこられ、兵士として働かされていたのである。『銃もなく、剣もなく、上着まで失われて』いるペーテルの姿から想像するに、彼は決していい兵隊ではない。いつも『いくさ』を避けていたのである。山の下の世界で苦勞したクララとペーテルは、ごく自然に山の世界に帰っていきこうとする。やっとの思いで山の世界に帰った彼らは、旧に変らぬ山の世界に安堵するが、彼らを待っていたハイジは、彼らの目の前で美しい虹に変化する。ペーテルは力を落とし、アルムじいさんのいすに腰をおろした。アルムじいさんとイメージが重なり一度に三十も五十も年をとった風体のペーテルにむかって、クララは『危ない、ペーテル、早く立って。』と呼びかけ、『もう一度、あたしたちの手で山の下の世界に、昔よりもみごとな、あの虹のように美しい町をつくらなくちゃ。』

と決意を述べる。

この作品の読解のポイントは、寓意された個所をどのように解釈し、それをどのように有機的に結びつけるかと作品全体が理解できるかというところにある。

登場人物や、その人物の足どり、場所等は単純明快で、迷うところはない。クララとペーテルが主な登場人物であり、その足どりははっきりしている。アルプス、即ち「山の世界」と、遠くに見える「山の下の世界」を往復し、もう一度「山の下の世界」において行くこうとしているにすぎない。

要は寓意された個所の解釈なのである。寓意された個所は次のように指摘できる。

- 1 アルムじいさんやハイジが水滴や虹に姿を変えるとこ
- 2 「山の世界」と「山の下の世界」そのもの
- 3 「いくさ」に狩り出されたペーテルが一貫して「いくさ」を拒否する姿勢
- 4 自ら立つことを知ったクララの足が、クララの気持に反して、「山の下の世界」に誘うところ
- 5 結末部で、いすにどつかと腰を落着かせているペーテルに向って、クララの「危ない、ペーテル、早く立って。」と言っているところ
- 6 結末部の「クララの小さいくつは破れて、その口からのぞき出た裸の足に、ひからびた焼け跡の砂が白く光った。」の部分
- 7 塔の上で傍観者をきめこんで「いくさ」をながめていた牧師が、流れ玉の音に驚いて塔から落ち、首の骨を折って死んだ部

分

多様な解釈の成り立つものや、難解でどのように解釈していいものか、いっこうにわからないところが多く、研究授業でなければやりたくない教材であった。分析力のなさを暴露してお恥ずかしい次第であるが、私は次のように分析した。

1の「アルムじいさんやハイジの姿の変るところ」は、多様な解釈が成り立つ。教科書の該当箇所を見ていくと、次の三個所である。

。「……この小屋に住んでいたアルムじいさんのめい娘のハイジが心をこめて、手を尽くして、いかなる名医もさじを投げたところのクララの足を立たせるように励まし助けてくれたおかげである。車のついたりすは永遠に谷底深く沈められた。奇跡であった。たちまち、どこで聞きつけたか、世界じゅうの新聞記者がカメラマンを連れてわーっとここにおしかけてきた。当座は大騒ぎであった。クララはいくたび写真に撮られたかわからない。ちなみに、そのとき、ハイジこそ奇跡を行った主演の名優として、カメラにねらわれて、のぼせるほど撮影されたのだが、どういうわけか、できあがった写真を見ると、どれにもハイジの姿は全然写っていないで、その姿のあるべき場所に一輪の小さいまっ白な花が咲いていた。どちらかといえばこのことのほうが奇跡のようであった。」(147頁)

。「軒の陰には粗末な木のいすが一つ置き捨てられている。ちょうど七日前の朝まで例によって、そのいすにはアルムじいさんが掛けていた。雪にうずもれた長い冬がようやくあけて、その朝一

面に輝く金色の光の中に、じいさんはうつらうつらしていたようであったが、いつか影薄れて、そよ風に透きとおるかとおるかに、ふっと消えたあとはいすの上に、雪のかげらか何かが溶けたように、ほんのりのひらにも満たないほどの水の滴が残っただけであった。これもふしぎといえばふしぎだが、山の自然の中に育ったハイジだのペーテルだのはそういう現象にはふだん慣れっくなっている。」(147頁)

。クララとペーテルとは今は胸をときめかして、ついぞ忘れたことのない山の道にかかった。山は再び春であった。晴れた空も頂に残った雪も、花のおい鳥のさえずりも、これは旧に変わらなかつた。しばらく登ると、かなたの高い岩の上に、もみの木が三本、元の景色のままに立っているのが見えてきた。その木の陰に、白く、小さく、ちらちら舞うかと思えたのは、確かにハイジのようであった。

『おーい、ハイジ。』

『ハイジ。』

二人はいっしょに叫んで、息をきって道を駆け登った。そして、もみの木の前まで来ると、そこにはハイジの姿は見えず、ただもみの葉にきらめく滴の、葉から枝へと、玉のように跳ねて、あ、小屋の軒へ、軒から谷へ、たちまち空に飛び上がって、日の光に映えて輝き、一連の五色の玉、峰の雪に懸け渡して、高く虹を現した。

『あつ。』

クララもペーテルも、我を忘れて、その虹の色に見とれて立ち

すくんだ。やがて、ペーテルは急に力が抜けたというようすでそこに置き捨てられていた粗末な木のいすの上にとんと落ち込んだ。(152ペ)

これらの部分は、作中でもかなり重要な位置を占めている個所であり、多様な解釈の成り立つ個所でもある。ハイジの場合は、「一輪の小さいまっ白な花」であり、クララとペーテルが「我を忘れて」「見とれて立ちすくむほど美しい「虹」である。一方、アルムじいさんの場合は、「朝一面に輝く金色の光の中」に光っている水滴である。美しさにおいて共通している。また、ハイジが虹に変わるところは、ハイジの死を表しているともとれる。(実際、授業ではこう解釈している生徒も多かった。)これを「山の世界」と結びつけて考えるとどうであろうか。

「山の暮しがクララの気に入らないという法はない。いや、反対に、それはすっかり気に入っていた。優しい、ハイジも、ペーテルも、牧場も、やぎも、すべて申し分なかった。冬の間の、雪に閉ざされた小屋の中ですら、暖炉の火までが完全に楽しかった。(148ペ)これがクララをとりまく山の生活であり、「申し分ない生活」なのである。アルムじいさんやハイジの姿の変わる現象も、この「山の世界」に属しているものであり、「山の世界」の特色の一つを物語っている。言ってみればクララにとって、「山の世界」は安住の地であり、そこにいる限り楽しい生活が保証されている。これは、ペーテルにも同じことが言える。

クララとペーテルの違いは、クララの方に「自ら立つことを知り、動くことを知った足」があるということである。「まだ知らない

い土の味」を求めて、クララは「山の下の世界」に旅立つことになる。足に促されて。そして、「山の下の世界」でクララを待ちうけているのは、「いくさ」である。

「クララはやみの中をあてもなく、火をくぐり抜けて、歯をむき出した番兵にどなられたり、目つきのよくない役人に脅されたりしながら、あちこちさまよった。地はのべつに炸裂して、足がひとところに立ち止まることを許さなかった。足は傷だらけになって、力尽きて、もういやだ、もうごめん、もうたくさんだとあえぎあえぎ、それでもそばから追いたたられて、なお歩き続けなくてはならなかった。さすがの足も、存分に思い知らされたようであった。(150ペ)

「もういやだ、もうごめん、もうたくさんだ」と思っても、「歩き続けなくてはならない」「戦」の持っている条件は、自然に我々の日常生活とイメージが重なる。

この世界で、クララとペーテルの再会が設定されている。「やぎ飼いのペーテル少年は戦が始まるとすぐ兵隊に狩り出された。ペーテルはもちろん戦なんぞよりもやぎと遊ぶほうが好きであったので、絶対にいやだとがんばったが、政府は例の暴力をふるって、これを山から引きずり下ろした。」(150ペ) (傍点筆者)

ペーテルにとっても、「戦」の持っている条件は同じ。くせねばならない世界」である。

「戦」にいためつけられた二人は、「山の世界」に帰ろうとするが、なぜ帰ろうとするのであろうか。二人にとっては「山の世界」

が安住の地であるからに他ならない。苦しくなれば逃げて帰ることのできる世界である。「山の世界」の特色の一つを物語っている。

次いで問題になるのは、「山の世界」に帰ったペーテルが、目の前でハイジが虹に変わるのを見て、いすに腰をおとした場面である。

「クララも、ペーテルも、我を忘れて、その虹の色に見とれて立ちすくんだ。やがて、ペーテルは急に力が抜けたというようすで、そこに置き捨てられていた粗末な木のいすの上にとんと落ち込んだ。それはかつてアルムじいさんがいつもひなたぼっこに腰掛けていたいすであった。クララはやつと我に戻った。ふとたたわらを見ると、いすの上に、や、アルムじいさん……いや、やっぱりペーテルであった。ただし、一度に三十も五十も年をとった風体の、影淡く、つい日の光に溶けてしまいで済むようなペーテルがそこにいた。

『危ない、ペーテル、早く立つて。』（152べ）

ハイジが虹に変わるのを見て、いすに腰をおとしたペーテルの気持は、虹にハイジの死を見てがっかりしたのだという解釈から、「山の世界」に帰ってきて安心したのだという解釈まで、多様な解釈が可能だが、いすに腰をおろしたペーテルの姿に、なぜアルムじいさんのイメージが重なるのであろうか。そしてなぜペーテルは三十も五十も年をとった風体になるのであろうか。またクララは何に對して「危ない」と言ったのだろうか。

クララは、いすに腰をおろしたペーテルの姿に、「山の世界」に安住することの危険を見たのではないか。「申し分のない世界」に

安穩と生活していれば、三十年でも五十年でも簡単に過ぎてしまう。何もしないでいいということは甘美なものだ。「山の世界」で生活している限り、人とぶつかることもなければ、「山の下の世界」で味わったように人からどなられることもない。自己主張をする必要もなければ、考える必要もない。時に流されていけばいい。それは魅力ある生き方かもしれないが、クララは容認できない。クララの言葉は次のように続いている。

。「あたしたちはここにじっとしてはいけないわ。すぐに立つて、また行かなくちゃ。」（152べ）

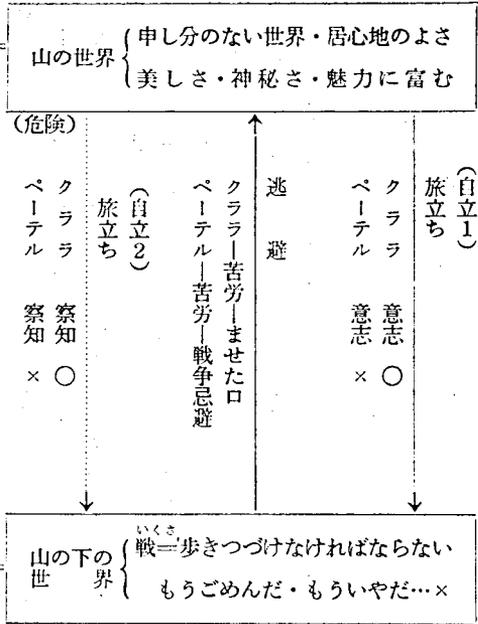
。「もう一度、山の下、あの遠くの町の方へ。」（152べ）

。「もう一度、あたしたちの手で山の下の世界に、昔よりもよくな、あの虹のように美しい町をつくらなくちゃ。」（152べ）

このクララの言葉は、彼女の生きていく姿勢を物語っている。「山の下の世界」で味わった苦勞がそう言わせるのであろうが、人間が生きるとは何かを問いかけた言葉として受けとってよいであろう。生きた人間として生きてゆける場所は、「山の下の世界」しかないのだと言っているように思う。

以上のように考えて、私は全体を次のようにまとめてみた。（これは研究授業での板書にも使った。）

現実逃避 = (苦しくなれば逃げて帰ること) (苦しくなれば逃げて帰ること)



(理由)
 (安住できるから)
 (魅力に富んでいるから)
 (考える必要もない)
 (自己主張する必要もない)
 (時に流されていればいい)
 (生きるとは?)

現実社会 =

三

教材の前後に次のような文章があるので紹介したい。教材の前におかれた紹介文として、

「ヨハンナ」スピリ原作の『ハイジ』は広く読まれている物語です。美しいアルプスの山々を背景として、心優しいハイジのいたわりによって、足の悪いク拉拉が歩けるようになるという、心温まる話は、あまりにも有名です。石川淳は、それをもとにして、後日談の形をとりながら、原作とは違った『アルプスの少女』を書きました。登場人物は同じですが、主人公がハイジからク拉拉に変わっています。いったい、作者はこの作品で、何を書こうとしたのでしょうか。読んで考えてみましょう。」

次いで、教材の後ろには、「発展」として次の文章がのせられている。

「わたしたちは、小説を読むことによって、今まで気がつかなかった人間の考え方や生き方に接して、自分の考え方や生き方を変えていく契機をつかむことがあります。それは、小説が、人間の生きる姿を、人間と人間とのつながりを、社会と人間との関係を、イメージ豊かに示してくれるものであり、また、それによって作者の生の真実を吐露するものであるからです。」

ここでは、人間にとって切実な、「人を信ずること」の問題をとりあげた、太宰治の『走れメロス』と、人間が現実の世界に生き、行動することの意味を問いかけた、石川淳の『アルプスの少女』とを読みました。いずれも、人間という存在を、あらためて

考えさせる作品です。

これから、さらに、そのような作品を探して読み、人間と人間とのつながり、社会と人間との関係、人間のあり方などについて、感じたり考えたりしたことを、みんなで話しあいましょう」

(傍点筆者)

傍点の箇所は、この教材の主題のありかと思いの方向とを示唆しているといえよう。寓意小説をはじめ読む生徒には、作品解明の手がかりになっていることは容易に想像される。これに助けられた訳ではないが、私も一つの観点—この作品には二つの世界が設定されているということ、主人公の足どりをたどることによって作品を解明していくということ—を示して授業を組み立てることにした。

目標、ならびに指導計画は次のとおりである。

目標 1 寓意小説を読むことよって、表現にこめられた意味を読みとる力を養う。

2 現実社会に対処して生きていく時の姿勢について考えさせる。

指導計画

第一時 全文を通読し、この作品の特色(寓意小説。「ハイジ」を典拠とした作品)を明らかにし、クララの足どりをつかませる。

第二時 「山の世界」と「山の下の世界」という二つの世界の内実の概略をつかませる。

第三時 二つの世界の特色を明らかにし、クララの旅立ちの意味を考えさせる。

第四時 クララとペーテルの足どりをたどることよって、二つの世界にこめられた寓意の意味と主題を明らかにする。

(研究授業)

四

最後に、反省と課題を述べておきたい。

難解な作品であるという気持ちから、こう読めば理解できるといふ読み方の型を示した授業を試みた。第一時で作品を読んだ後の生徒の反応は、「何のことかさっぱりわからない」「こんな小説読むのはいやだなあ。」というものが多く、こういう生徒には、この授業はある程度の成果があったであろう。しかし、生徒の「開眼された読み」へつながっていったかということになると、心もとない。もっと生徒が活躍できる場面をつくるなどの手だてがいたのでないかと思う。今後の課題である。

また、授業が観念的になりすぎたきらいがあり、「現実社会に対処して生きていく時の姿勢について考えさせたい。」という目標が、生徒にとつてどれだけ実感できるものとなったか疑問が残る。

また、「牧師」にこめられた意味と背景がわからず、授業で全く扱えなかった。研究授業後開かれた「協議会」の席で、英語科の先生から聖書を踏まえた表現であると指摘をうけ、意味の深さに驚いた。作品の中では、かなり重要な意味を持っていると予想はしたが、全くそれに触れないでどれだけ十分な説解ができたか、深く反省させられる。

(本学附属中・高等学校教諭)